

通釈 『八重葎物語』(その二)

妹尾好信

【キーワード】八重葎、中世王朝物語

はじめに

中世王朝物語『八重葎』の通釈を試みた。今回はその第二回目で、『広島大学大学院文学研究科論集』第71巻(平成23年12月)に掲載した「通釈『八重葎物語』(その一)」に続くものである。底本には原豊二氏蔵『八重葎物語』を用い、濁点・句読点・かぎ括弧等を付した他は原文通りに翻刻して本文とした。同本は静嘉堂文庫蔵本と同系統なので、静嘉堂本との異同を行間に注記した。また、本文の不審箇所についても行間に注記した。便宜上、『鎌倉時代物語集成』第五巻所収の翻刻本文の形式段落にしたがって段落分けし、各段落に通し番号と短い見出しを付した。引歌・引詩等、典拠ある表現についてのみ、訳文に*を付して注を付けた。訳文は原文を尊重したが、主語を補うなど注釈なしで通読できるように配慮した。引歌の引用本文・歌番号は『新編国歌大観』によった。今回は、第21段落から第36段落までを扱う。

【21】中納言、母上と対面する

御まへまるわたり給へば、うへは白き御ぞに二あひのこうちぎ奉りて、御き丁ひきよせ、をかしげなる御火をけによりゐさせ給ふ。みつけ給へて、めづらしからん人のやうにいそぎ出むかはせ給ひて、かなしういとをしきものにおぼしたる御さまも、あはれにかたじけなし。「御丁に入せ給ひね。透間の風もわりなうふき侍る」ときこえ給へど、「さもおぼえずや」とて、なほつゐるさせ給へば、たちより給ひて、き丁てづからひきよせ、御火をけとりまかなひ奉り給ふに、なみださへこぼし給ひて、「たのもしう、嬉し」と見給ふもことわりなりかし。君にもおなじさまなる御火桶奉り、上らうだつ人ひとりふたり御まへにさぶらひて、さるべきくだ物などまゐりて、しめぐと御物がたり聞えおはす。

〔通釈〕

中納言が御前に参上なさると、母上は白いお着物に二藍の小桂をお召しになって、御几帳を引き寄せ、小綺麗な火鉢に寄りかかつて

座つていらつしやる。中納言をお見つけになつて、まるでめつたに
会わない珍しい人が来たかのように急いでお出迎えになつて、かわ
いく愛おしい人と思つていらつしやるご様子も、心に染みてうれし
く思う。中納言は、「御帳の中にお入りなさいませ。隙間風がひど
く吹き込んでいます」と申し上げなざるけれども、母上は「そんな
にも感じませんよ」と言つてまだそのままいらつしやるものだから、
中納言は母上の近くにお寄りになつて、几帳をご自分の手で引き寄
せて、火鉢をとりつくろつてさしあげなざる。それを見て母上は涙
までこぼしなかつて、この息子を頼もしい、うれしいと思つてご覧
になる、それも至極もつともなことである。母上は、中納言の君に
も同じような火鉢を用意させ、上臈格の女房を一人二人御前に伺候
させて、適当なお菓子などをさしあげて、しんみりとお話を申し上
げておいでになる。

〔22〕中納言、母上から縁談について小言を言われる

「かの御ゆい言るはいかゞ思ひなり給ふ。『うへにもきかせ給ひて、
「ひがくしきこと哉。おとどのいひおかずとも、さやうのうしろ
みはまうけて、たゞよはしからでおほやけにつかうまつらむこそか
しこからめ。まるで、ゆるごんにしたなる事をきかざるは、いかな
る心ならん。なき人のためもうしろめたき事心なり」とのたまはせたり』と、きのふ中宮よりわざと中納言の君してつたへ聞えさせ給ひ
つる。年の内はほどもなければ、年帰りにて、きさらぎばかりに思ひ

立給はゞ、嬉しかるべきわざを」との給へば、「うちにさへ、さき
こえさせ給はんど、からき心地し侍る。何か、ひがみたる心づかひ
は物し侍らん。かの母ぎみぞ、『左大将か、さらずは内侍にてみか
どに奉らむ』などおもひかしづきしに、思ひの外のなるすくせとて、心
もゆかずおとしめらるゝと。ねぶ人の侍れば、いとくちをししく思ふ
給へらるゝ。とのゝかなしとおほすあまりに、さらでもありぬべき
事どもをあなたがちの給ひおかせ給ひて、かたゞくにあぢきなくむ
つかしきみゝをきかせ給ふ事」と申給へば、「あやし。それはひが
ごとならむ。『おとゞもうへも、物うげに見え給ふ』とてうらみ
の給ふ」とこそ、こゝなるごたちのしれるものゝかのわたりにある
なんかたりしときく。大かたもさこそほのめかし給へ。大将殿はし
らず、うちにはかうきでんさぶらひ給ふに、おなじえだにてつらな
り御覽ぜさせんとは、二所ながらよも思ひ給はじ。たゞかけはなれ
むとせちにはぶき給ふあまりのつくり事ならん」との給ひあはせた
るもいみじうをかしけれど、つれなくねんじて、「したゝかにつも
りける哉」と、雪にまぎらはしてやみ給ひぬ。

〔通釈〕

「あの父上のご遺言は、どうお思いなのです？』帝にもお聞きあ
そばされて、「ひねくれたことだな。大臣が言い置かなくとも、そ
ういう後見はきちんと作つておいて、ふらふらししないで朝廷に仕え
るのが賢明というものだ。まして、亡父が遺言にしたということに
従わないのは、いったい何を考へているのか。亡き人のためにも申

し訳ない心だな」と仰せでした』と、昨日中宮からわざわざ女房の中納言の君を使いにしてご伝言なされたのですよ。もう年内はどれほどありませんから、年が明けて、二月ごろにご結婚をという気になってくださったらうれいのですけどねえ」と母上がおっしゃると、中納言は、「帝までがそのように仰せになるとは、つらい気がいたします。どうしてひねくれた心など持っておりましょう。あの方が母君が、『左大将と結婚させるか、それでなければ内侍として帝に差し上げよう』などと思つて大事にしていたのに、私との縁談が持ち上がつて、予想外の展開だと本意に思つて、私のことをおとしめていらつしやると知らせてくれる人がいるものですから、とても悔しく思つてゐるわけでして。殿が私をかわいとお思ひにならぬあまりに、しなくてもよかつたことを無理に遺言なさつて、どなたにも不愉快で聞きづらい噂をお耳にされることで……」と申される。すると母上が、「変だわ。それは嘘でしょう。『右大臣殿も北の方も、中納言は気が進まないようにお見えだ』と恨み言をおっしゃつてゐる」と、ここに仕える女房の知り合ひで先方にいる者が語つたと聞きます。大概にも、あちらではそのようにほめかしておいでですよ。左大将殿との結婚はいざ知らず、帝には弘徽殿の女御がお仕えしていらつしやるのに、同じ姉妹でそろつて帝のご覧に入れようとは、右大臣も北の方も、お二人ともまさかお思ひにはありませんまい。ただこの縁談から遠ざかろうと、むやみに切り捨てなさるあまりの作りごとでしょう」と、周囲に心を合わせておっしゃ

るのも、中納言には笑止千万に思われたが、そこはぐつとこらえて、「それにしても、ずいぶん積りましたね」と、雪に紛らわしてその話題は終わりになされた。

〔23〕師走、母上、中納言に思ひ人がいることを知る

しはすのほどはいとゞかきくれて、ゆき・あられがちにふりみだるゝに、むぐらのやどはたへてすむべき心ちも有まじげなれど、うち。のまめやかなるかたさへ、あはれに有がたくとぶらひ聞え給ふに、なぐさむ事おほかるべし。

ついでたちのよそひもおぼしやりて、女のさうぞく一くだり物すべきよし、中将の君のもとへの給ひたれば、うるはしき綾おり物あまた取出て、うへのおまへに「かうく」ときこゆれば、「誰に物するにか。これをや、かれをや」と御らむじくらぶ。

人々つきしろふに、心えさせ給ひて、「あはれとおもふ人やもたる。もしさやうのれうならば、はえなきは物しと見るべきぞ。山吹、こきあやのうちき、さくらのほそながこそあざやかにをかしうはあれ」とてまるらせ給ふにも、「れいの人の心ならましかば、こゝらうつくしくらうたきちごども有て、かくつれぐくなるに、うま子あつかひしてなぐさめてましを。あさましうよづかぬ有さまこそ、たがためもくるしけれ」との給はするついでに、中将の君、しのびて、此人しれぬ御物あつかひを聞えさすれば、ほゝろみ給ひて、「いづよりぞ。かゝるもの有とみゆるばかりのけしきも見えぬは、まるの

みやさは見るらむ。をとこといふものゝかれがやう成やある。子ながらも有がたきまめ人なれば、さぶらふ人々もすこしあはくしくみゆるなどは、はづかしくこそあれ」との給ふ。

〔通釈〕

師走の頃はますます空が暗くなり、雪や霰模様になり乱れるので、葎の宿では住み続ける気にもなれないように見えるが、中納言が内向きの実用的な方面までお心遣いされて、しみじみとありがたく思われるように見舞ってさしあげられるので、心慰むことが多いはずである。

元日の晴れ着についてもご配慮なさって、女性用の装束を一揃い準備するようにと、女房の中將の君のもとへ指示なさったので、中將の君は美しい綾織物をたくさん取り出して、北の方の御前で「これこれのこと」と申し上げると、「いったい誰に贈るのでしょうね。これがいいかしら、それともあちらかしら」と、あれこれ見比べなさる。

女房たちがつつき合っているのを見て北の方は合点がいきなさって、「中納言は大事に思う人を持つてるの？もしそのような方のためなのでしたら、見栄えのしないものは嫌がられるでしょうよ。山吹襲で濃い綾織の桂、それに桜襲の細長が、目にあざやかで素敵だわね」と言ってそれらを差し上げなさるにつけても、「中納言が人並みの心の持ち主だったら、今ごろはたくさんのかわいい子供がいて、私は、こうして手持ちぶさたな折に、孫のお守りをして心を

慰めていることでしょうか……。あきれたことに、まるで世間並みでないご様子なのが、誰にとつても困ったことだわ」とおっしゃった、その機をとらえて、中將の君が、こつそりと、中納言のこの人知れずお世話している方のお耳に入れたところ、北の方はほほえみなさって、「いつからなの？そんな女性ひとがいるような気配もまるで見えないのは、私だけがそう見ているのかしら。男という者で、彼のような者がいまいしょうか。我が子ながらも、中納言はめったにない真面目男なので、仕える女房たちも、少し軽々しいところのある人は気が引けて恥ずかしくなりますね」とおっしゃる。

〔24〕中將の君、北の方に情報の出所を語る

「下にも、それと見とがめ奉るばかりの御前はひは露見えさせ給はず。かのわたりのことうるさがり給ふを、『いかなれば』など、おのがじゝかたらひなげき侍りしに、『今はいとどうとくならせ給はん。しかぐの御なぐさめ所あり』とあきのぶの朝臣の語り侍りし。『いみじうかくさせ給ふ。ゆめけしきみゆな』とこそいましめられ侍りし。おまへにもさ心えさせ給ふべく」と申せば、うなづき給ひて、「まことに、かのおとゞのわたりに聞給はむはいとをしかるべきわざなり。みづからもそれをおもひてぞしのぶらむ。われにてしりがほに物せんは、こゝかしこきゝぐるしかるべし。人々も其よしにもてなむさんよかるべき。めづらしきさまになどはきかぬか。さやうの下草にだに」との給ふものから、「しらずがほつらむとい

ひしには、またこよなくかはりたり」とてわらひ給ふ。としもくれぬ。

〔通釈〕

中將の君が、「私どものところでも、中納言様はそれと見とがめ申し上げるようなご様子は、これっぽちもお見せにはなりません。例の右大臣家との縁談をうるさがりなさるのを、『どうしてなのかしら』と女房たちがめいめい語り合つては歎いておりましたのを見て、『今はますます縁談には疎くおなりだろうよ。これこれの慰め所がおありなのだ』とあきのぶの朝臣が語りましたのです。『中納言様はひどく隠しておいでだ。決して知つてゐるようなそぶりを見せるでないぞ』といましめられました。北の方様にもそのようにお心得なさいますように」と申し上げると、北の方はうなずかれて、

「本当に、そのことを右大臣殿のあたりにお聞きになられたら、とてもお気の毒だわね。中納言自身もそのことを思つて隠してゐるのでしょうか。私が知つてゐるような顔をするのは、どちらにとつても聞き苦しいことでしょう。あなたたちもそう心得て振舞うのがよいですよ。それにしても、その女性には珍しいさま（懷妊）だといふようなことは聞かないですか。せめてそのような下草（忍び所）にでも御子が生まれれば……」とおっしゃるものの、「さつき知らん顔をしていようと言つたのとは、またずいぶん変わつてしまつたわね」と言つてお笑いになる。そうこうするうちに、年も暮れた。

〔25〕元日、中納言の晴れ姿に人々感嘆

たち帰る空はきのふにかはるけぢめも見えねど、風のおともうちつけにゆるくきゝ渡され、鳥のさへづりも霞むこゝちしてをかしきに、中納言殿、梅の御なほし、あをにびのかたもんの御さしぬきをたをくときなし給ひて、まづこなたにわたり給ひてのち、御くるまに奉りて内に参り給ふ御さまの、せちになまめかしきぞ、今日のことぶきにも増ためて度見えける。

〔通釈〕

年が改まつた元日の空は昨日と何ら変わるところは見えないけれども、風の音も急に穏やかに聞こえるようになり、鳥のさえずる声もどこか霞がかつたような気がして趣深い中、中納言殿は、梅襲の直衣に青鈍色の固文の指貫をしなやかに着こなして、まず母上のもとにお寄りになつた後、御車にお乗りなさつて参内なされるお姿の、優美極まりないさまは、新年を迎えた今日の慶びにも増してすばらしく見えたことである。

*「かくて明けゆく空の気色、昨日に交りたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞする」（『徒然草』第十九段）による表現。

〔26〕中納言、律の宿を訪れ、女君のもとでくつろぐ

おはやけわたくし物さわがしき程すぐして、むぐらの宿へはおとづれ給ふ。女もありし御こゝろざしのいろくををかしうきなし給ふ。たそがれのかたははらめ、かみのかゝり、いひしらずあてにら

うたげなり。ひもときちらし、打とけ給ひて、「かくてこそ心やすかりけれ。『玉のうてなも八重むぐら』とはよくもいひけるふるごとかな」とて、かひなを枕にてふし給ふに、まくらのほどにさうのごとはしすこしみゆれば、をよびてひきよせ給ひて、「この物よ、まろがなかだちなめり。いとむつまじう思ふべきを、『又いかならん人をかひき入まし』とおもふぞうしろめたき」とほゝゑみてきこえ給ふに、女いみじうはづかしと思ふ。

てまさぐりにし給ふを、「おなじくは」とゆかしげにみゆれど、「此わたりにもわがごとくなる人も有べし。しのぶとすれど、おのづから『それかあらぬか』とけしき見る人もあらんに、此ものゝ音に、『さればよ』など、いちじるくかゝるやつれをしられんもくるし」とおぼせば、「いな、こゝにてはつゝまし。心やすきくまもとめてぞ、あめつちをうごかすばかりひき出む。ものゝ上手は、おぼろけにては手ふれぬ物ぞ」など、わらひ給ひて、「さまゞくのねをしらべとゝのふるより、まくらにしたるは、こよなくをかしきぞ。君もね給へ。いざ、もろともに」とて、うちふし給ふにぞ、身のくちをしさはかへすゞく思ひしられる。

〔通釈〕

公私に慌ただしい時期が過ぎてから、中納言は律の宿へは訪れなされた。女君も、年末に贈られたさまさまの色あざやかな装束を美しく身につけていらつしやる。黄昏時の薄明かりで見る横顔、髪のかかり具合、言いようもなく上品で可憐である。中納言は、お着物

の紐を解き散らし、文字通り打ち解けなきて、「こうしていると本心に心が安らぐよ。『玉のうてなも八重葎』とはよくも言ったものだね」と言つて、女君の腕を枕にして横になつて、枕元に箏の琴の端の方が少し見えるので、手を伸ばしてそばに引き寄せなきて、「これがね、私とあなたの仲立ちみたいなものなんだよ。だから、とても親しみ深く思うべきなんだけれど、『これがまたどんな男を引き入れるかわからない』と思うと気が気でないのだよ」と、ほほえんで申されるので、女君はひどく恥ずかしいと思う。

中納言が琴を手まさぐりになざるのを見て、女君は「どうせなら演奏してほしい」と興味津々の体に見えるのを、中納言は、「この近くに自分と同じような人がいるかも知れない。忍んではいても、自然と『それかあらぬか』と様子をうかがう人もあるうに、この琴の音で『ああやつぱりあいつだ』などと、はつきりと、こんなお忍びのやつれ姿を知られるのもつらい」とお思いになるので、「いや、ここでは気兼ねがする。どこか気が許せる所を見つけてから、天地を動かすほどの名演奏を聞かせてあげよう。名人というのは、並大抵には楽器に手を触れないものですよ」などと言つてお笑いになり、「さまざまな音色を奏で調べるよりも、枕にした方がずっと風流だよ。あなたも寝なさい。さあ、一緒に」と言つて、琴を枕に横になられる。そのことで、女君は我が身の情けなさを返す返す思い知られるのであつた。

* 「なにせんにたまのうてなも八重むぐらいつらんなかにふたりこそねめ」

(古今六帖・第六・むぐら・三八七四)を引く。*「たそかれにそれか
あらぬかことのねをしらべかはらできくよしもがな」(兵部卿物語・一)を
引くか。ここでは、琴を弾いているのは中納言かどうか、誰だろうかの意。

〔27〕中納言、帰りぎわに女君と和歌を贈答

あけゆくに、かへり給ふとて、つまどをしあけて見出し給ふに、
かきねの雪は春をしらぬがほにこほりとぢめてしろくみゆるに、空
はやゝかすみわたたりて、やぶしがくれの鶯も今ぞめさましてわかや
かに鳴。

「春霞たちるにかゝる心とはあしたの空を見てもしらなん
しづこゝろもなしや」との給ふ。

わがためといかで見るべきおしなべてはるの物とてかすむかす
みを

「おもはずにもとりなし給ふ哉。ふかき所をたづね給はゞわが心に
こそ入給ふべけれ」とて、なほ立かへりいでがてにやすらひ給へり
とか。

〔通釈〕

夜が明けてゆくのでお帰りになろうと、中納言は妻戸を押し開け
て外を見出しなざると、垣根の元に残った雪は春の訪れを知らぬ顔
で固く凍りついて白く見えるが、空は早くも霞が立ちわたって、藪
に隠れていた鶯も今は目を覚まして若々しい声で鳴く。

「春霞…(立っても座っても、いつもあなたのことが心にかかっている

私だということ、この霞が立ちわたっている朝の空を見るにつけても
わかつてほしいのです。)

気持ちが落ち着くこともありませんよ」と中納言がおっしゃると、
女君は、こう返歌なさった。

わがためと…(私のためだとはどうしてわかりましょうか。どこも一
様に春の風物として霞んでいる霞なのですから。)

「意外な受け止め方をなさいますね。深いところはどこかと尋ねて
いらつしやると、私の心にお入りになるはずなのに」と言つて、中
納言はなおも踵を返し、出て行き難そうにためらつていらしたと
かいうことだ。

*「山よりもふかきところをたづねみはわが心にぞ人はいるべき」(千載集
・卷十五・恋五・九二二・大納言寄信)を引く。

〔28〕中納言、中務の宮と歎談。二月、母上発病する

去年の大みのもみぢの宴を、みや、つねにの給はせいで、又
さばかりのをかしさもがな」ときこえ給へば、「かうのどかならず
まぎれありくも、そのかへさからぞ」と、まづ思ひ出られ給ひて、
「右衛門のかみなどもわすれぬさまに申され侍る。はな盛のほどに、
大原へ御ともつかうまつりて、をしほの花御覽せさせむ。神代のこ
とおぼし出むにます事さぶらふまじ」ときこえ給へば、「かならず、
おくらかし給ふな」などのたまひくらすに、二月の十日頃より、母
うへ、御むねをやみ給ひてくるしがり給ふ。

〔通釈〕

去年の大堰での紅葉の宴のことを、中務の宮はいつもお話しになつて、「またあれほどの風流韻事があるといいねえ」と申さるので、中納言は、「こうして落ち着きもなくこそそ出歩くようになったのも、その日の帰り道からだつたなあ」と、まず女君のことが思い出されなかつて、「右衛門督などもあの日のことを忘れられないように申されています。この次は、桜の花盛りの頃に、大原（大原野）へお供させていただきますして、小塩の山の花をご覧に入れましょう。神代のことを思い出しなされるのにまざることはございますまい」と申し上げなされると、宮は、「きつとだよ、置いてきぼりになさるでないよ」などと日が暮れるまでお話をされるのだったが、そんな和氣藹々をかき消すように、二月の十日頃から、母上が胸を患つて苦しがりなされた。

*「おほはらやをしほの山もけふこそは神世の事も思ひいつらめ」（古今集・卷十七・雑上・八七一・業平朝臣）を引く。

〔29〕母上の病状重し。人々の嘆き

かりそめにもあらで、いと大事に見え給へば、なにがしかれがしと僧どもめしよせて、御いのり初め給ひ、とのゝ内さわぎのゝしるほど、おもひやるべし。君はつとそへ居給ひて、御ゆなどすゝめ給へど、露も御覧じ入ねば、いみじうおぼしなげき、よるひるとあつかひ、「いかさまにしてすくひ奉らむ」と、こゝらの御ぐわんども、

おぼしいたらぬくまなげなり。

中宮よりもしばくとぶらひ聞え給ふ。たゞこの御かたをまことの御おやとまたのませ給へば、なげきおぼしたるさま、いかでおろかならむ。中納言の君、さいしやうの君など、つけおかせ給ひ、御みづからもおりさせ給はんことをのたまはず。中つかさの宮もいみじうなげかせ給ひて、心ふかく聞えさせ給ふ。うへはたましてかなしうおぼすまゝに、みづからわたり給ひて見奉りあつかはせ給ふ。さらぬところぐの御とぶらひ聞え入もひまなげなり。

〔通釈〕

母上のご病氣は一時的なものではなくて、とても重篤にお見えなので、誰かれと僧たちを呼び寄せて、病平癒のご祈祷をお始めになり、邸内上を下への大騒ぎぶりは、想像してほしい。中納言の君は付きつきりで看病して、薬湯などをお勧めなさるのだが、母上はそれを少しも口にされないで、大変思い嘆きなかつて、昼夜をおかずお世話して、「なんとかしてお救い申し上げよう」と、各地の寺社にたくさんの願をかけ、思い至るあらゆる手立てを尽くしている様子である。

中宮からもしばしばお見舞い申される。中宮はただこのお方を実の親のように頼りにしていらつしやるので、ご病氣のことを嘆き悲しんでいらつしやるさまは、どうして並大抵であろうか。中納言の君や宰相の君などの信頼できる女房を派遣して看病にあたらせなさり、ご自身も宮中から里下がりなさりたい旨をおつしやる。中務の

宮もひどくお嘆きになって、心のこもったお見舞いの言葉を申し上げなさる。宮の北の方はまた、宮以上に悲しくお思いになるままに、自らお越しになってご看病あそばされる。それ以外の所々からのお見舞いが届けられるのも、ひっきりなしの様子である。

〔30〕中納言、律の宿へは行けず。帝の出仕御免の配慮。

かゝる御こゝろまどひの折からなれば、あらぬねざしなどへもわたり給はず、み心ちのさまなど聞え給ひて御ふみばかりぞいく度となくかきつくし給ふ。されど、あたりたる御宮づかへはかゝし給はねば、内ばかりへは参り給ふを、うへも御覧じて、「さばかり心くるしき事をおきてかつつかふるは、あるまじきことなり。萬をすてゝしづかにこもりあて、よろしく見たてね」と、かたじけなくの給はずれば、かしこまり給ひて、上にも「しかくなん」と仰言のかしこさを語り申給へば、物もおぼえ給はぬ心ちにも、ありがたくおぼしよろこぶ。

〔通釈〕

このようなお取り込みの最中なので、中納言は「あるにもあらぬ根ざし」と称した（19）参照）女君のもとへはお出かけにならず、母上のご容態などを説明なさって、お手紙ばかりは幾度となく精一杯お書きになる。そうは言っても、当面するご勤務は欠かしなさらないので、宮中にだけは参上なさったところ、帝は中納言の姿をご覧になって、「あれほど気がかりなことを置いておいて一方で出仕

するというのは、あつてはならぬことだ。万事を棄てて静かに家に籠もつていて、母君がよくなるよう見守りなさい」とかたじけなくも仰せられるので、中納言は謹んで御配慮を拝して邸に戻り、母上に「これこれでした」と、帝の仰せ言のもつたいなさをお語り申されると、母上は意識もはっきりしない気分にも、ありがたく思いお喜びになるのだった。

〔31〕大貳、再婚相手として、女君の叔母に関心を示す

其頃、中つかさのみやの御めのとのをとこ、大貳になりてつくしへ下る。北のかたは三四年さきにうせにき。「いかでさるべき人もがな。かたらひて行かん」とおもひなりて、此御をばのとなりのあるじはやうよりしれるなからひにて、折々いでまうでくる。とし四十七、八なりける。「など今までかくては過し給ふ。女ぎみたちもおほく物し給ふに、うしろみなきは心ぐるしきわざになむ」ときこゆれば、「さかし。われもさおもひ給ふれど、其ほだしどものおつかひをうるさく思ふにや侍らむ、うけひく方の侍らねば、けふく」とすぐして、なにがしがしるまじきわざまでとりまかなひて、いとたえがたく、見るめもかたくなしう侍り。ゆゑづきたるうばもさぶらはゞ、なかだちしたまへ。此あなたにおはせし人は、今にひとりや物し給ふ。これなどはおもひ立給ふまじくや。御めいとか聞えし女君ももるともにいざなひ給はゞ、みんぶのたゆふにあはせ奉りて、わがひとつのあとをもしろしめさせむとおもふは、につかは

しからぬことゝやおぼす」といふ。

〔通釈〕

その頃、中務の宮の御乳母の夫が、大宰の大貳に任官して筑紫（九州）へ下ることになった。北の方は三、四年前に亡くなった。大貳は、「なんとかしかるべき人がいないものか。話を付けて伴って行きたい」と思うようになって、——この女君の叔母の隣家の主人は早くから知り合いの仲で、大貳は時々隣家にやつて来る。大貳の齡は、四十七、八歳であった。「どうして今までこうしてやもめ暮らしをしていらつしやるのか。女君たちもたくさんおいでなのに、お世話役がないのは気がかりなことでしょう」と隣家の主人が申し上げると、大貳は、「そうなのですよ。自分もそう思うのですが、その絆（絆）ども（娘たち）の世話を厄介に思うのでしょうか、承知する女もいないので、今日今日と日々を過ごしていて、自分が関知しなくてもよいような家事までとりつくるって、とても耐え難く、人目にも見苦しいのです。由緒ある婆（ば）でもいましたら、仲介なさってください。この向こうにお住まいだった方は、今も一人でいらつしやるのですか。その方などは思い立ってくださいませまいか。姪御さんとか聞いていた女君も一緒に誘（よび）いただけたら、息子の民部大輔に娶（よめ）せて、我が一代の跡継ぎとして領地を治めさせようと思うのは、似つかわしくないこととお思いですか」と言う。

〔32〕大貳、弁舌を振るって隣家の主人を説得

「それなむいとよき御なからひにものし給はん。さも思ひ給はつたへてんを、こそこの秋よりいかなるたよりにか、こひだりのおとゞの中納言の君かよひ給ひて、よろづにまめやかにきこえ給へば、『おもはずにうつ。しき御すくせ有て、この御とくを見る事』といみじうよろこび給ふめれば、なにかはかぐくと『くだらむ』とは思ひたち給はんとおもひ侍る」などいへば、「あなはかなや。さてそのかむだちめのおはすらむをよき御さいはひとやおもひ給ふ。よろづのざえすぐれ、かたち・心もかしかうおはすとて、大やけのかたじけなくめぐみ給ふにこゝろおごりし給ひて、おとゞの御ゆい言に右大臣どのゝ中の君にあはせ奉り給ひて、御うしろみをもせさせ給ふべく、またうちゝにも、『このとのをたのみきこえてなにがしとおもはんむ、行道もうれしかるべく』と、かへすぐきこえおき給ひてしかば、とのよりはいとねむ頃に度々聞え給へど、『みかどの姫宮ならではえ奉らじ』とて、みそぢ近くなるまでひとりずみしてくらし給ふよ。この女君などは、おほすことかなふまでのなくさめなり。さるは、えぐちのきみなどゝおなじことには侍らずや。今ひととせ二とせが程にすさめられ給ひて、もに住むしのわれからねをなき給はんは、いとほほしきことなりや。みむぶのたゆふがめにておはしまさば、つかさ・くらゐこそ其中納言どにはおよび侍るまじけれ、かほかたちはあまりまけ奉ることも侍るまじ。こゝろはたまめやかなるものなれば、たかきもみじかきもなべて女のしのがたきことにし給ふなるわきめもつかひ侍らじ。これぞまづな

のたからにもまさりて心行給はむ。其外のもてなしは大臣・大将の北のかたにもおとし奉らじ。世の中に人のかげめほどくちをしき事あらんや。子など出くれば、まことのうへの御子にとられ、あるは本妻にせためられて、あまほうしに成て山里に取こもれど、もとよりもよほさぬ道心なれば、佛の御心にもかなはで、此よもかの世もいたづらになさずや。すこしも心かしこき人は『一夜二世のふしはよしなし』とて、しうののたまふ事をさへいなみ侍るなど聞つたへ侍る。されど、ことわり成かし。をとこだにちゑ・さいかく有はかたければ、ましてはかなき女におはすれば、うれしうめでたきことにの給ふも」など、たゞみをつきしろひつゝはちぶきをるに、はや此人もかたは^らはられて、「まことに、の給ふことにひとつしてあだ成事は侍らぬ」などいふもをこがまし。

〔通釈〕

「それはとてもよいご縁組みでございましょう。そのようにお思いならば話をお伝えいたしますが、去年の秋から、どういいうきつかけがあつたのか、亡き左大臣のご子息の中納言の君がお通いになつて、万事真面目にお話し申されるので、『姫君には思いがけず立派な宿世^{すくせ}があつて、この方のお蔭を蒙ることよ』と、ひどく喜んでいらつしやるようなので、どうして期待通りに『筑紫に下ろう』とは思ひ立ちなさろうかと思うのです」などと隣家の主人が言うと、大式は、「ああ、なんて頼りないことよ。それで、その上達部^{かんだちべ}がいらつしやるのかいこのをたいしたご幸運とお思いのですか。あらゆ

る才学にすぐれ、容貌も人柄も立派でいらつしやるというので、帝もお引き立てになるのに心驕^{おご}りなきつて、父大臣^{おとと}のご遺言に、右大臣殿の中の君にお会わせ申されてご後見をおさせしようとなさり、また内々にも、『この右大臣殿をお頼り申して、私だと思つてくれると、冥土に行く道もうれしかろう』と何度も何度も申し置きなさつたので、右大臣殿からはとても懇切にたびたび縁談を申し入れなかつたけれど、中納言殿は『帝の姫宮でなくてはとても妻にはできそうにない』と言つて、三十^{みそ}近くになるまで独身で暮らしていらつしやるのですよ。この女君などは、ご希望がかなうまでの慰めです。それでは、江口の君(遊女)などと同じことではありませんか。もう一、二年のうちに棄てられなきつて、藻^もに住む虫の我から(自分のせいだ)と声をあげてお泣きになるだろうことは、はなはだお気の毒なことですよ。民部の大輔の妻でいらつしやつたら、官位こそその中納言殿には及ばないでしょうけれども、顔かたちはあまり負けることはありません。人柄はまた真面目な者ですから、身分の高い低いを問はずおしなべて女が耐えがたいことになさると聞く脳目(浮気)も使いますまい。これはまずどんな宝にもまさつて満足のゆくところでしょう。その他のもてなしは、大臣や大将の北の方にも劣らせ申しませぬ。世の中に、人の陰女^{かげめ}(隠し妻)ほど残念なことがありますか。もし子などが生まれたら、正妻の御子として奪われ、あるいはもとの妻に責めさいなまれて、尼法師になつて山里に籠もつても、もともと湧き起こらない道心なので、

仏の御心にもかなわないで、この世もあの世も無駄にしてしまいませんか。少しでも心の賢い人は、『一夜や二夜の共寝は意味がない』と言つて、主人のおっしゃることまで拒絶する、などと伝え聞いております。——しかし、無理ありません。男でさえ智恵・才学があることは難しいのですから。ましてはかない女性でいらつしやるのだから、うれしくすばらしいことだとおっしゃるのも」などと、疊(敷物)をつつつきながらぶうぶうまくしたてるので、もはやこの人(隣の主人)も丸め込まれて、「まことに、おっしゃることにひとつとしていいかげんなところはございませぬ」などと言うのもばかげている。

「あまのかるもにすむむしの我からとねをこそなかめ世をばうらみじ」(古今集・巻十五・恋五・八〇七・典侍藤原直子朝臣)を引く。「たかくともなにかはせんくれたけのひとよふたよのあだのふしをば」(大和物語・第九十段・修理の君)を引く。

〔33〕叔母、大貳との結婚を承諾し、女君を伴う算段

昔より隔なくいひかはす中にて、れいもかたみに行かよへば、其夕ぐれに、となりのあるじまうで来て、大貳のいひしことども、こゝちよげにかたりつふれば、もとよりすこしひなびなほくしきをば君にて、「いかでか」などいひあへず、うちえみうなづきて、「身づからの事は、今更のよはひにまた人にみえ奉らむもよき事とおもひ侍らねど、いみじうかなしと思ふきみのためたによろしき

ことに侍らば、命をさへうしなひてもと思ふ給へば。ましてこれはよのつねある事なればいかゞはせんに、思ひよわりて。もろとも物しはべらむ。としたけ物の心もすこしはわきまへたるわれだに、行すゑの事まではたどり得で、此頃の御ありさまをひとへにめでたしと見奉れば、ましてわかき心にはひたみちになびき給ひてあはれ成事に見え給へば、有のまゝに聞えさせばともなひがたくや。たゞよくたゆめて、つくしへまかるほどにいざなひてまし」といふ。「それにまざることやは。さらば、大貳に其よしを」などいひて、かへりぬ。

〔通釈〕

昔から隔てなくものを言い合う仲で、普段も互いに行き通つていたので、その日の夕暮れに、隣の主人が女君の叔母のところに参加して、大貳が言つたことどもを、さも気持ちよさそうに語り伝えると、もともと少し田舎じみて品のない叔母君で、「どうしてそんなことが」などとも言ふことができず、笑いを浮かべてうなずいて、「私自身のこととは、今さらこの齢でまた人と結婚するということもよいこととは思いませんけれども、とてもかわいいと思う君(女君)のためによいことでありましたら、命まで失つてもと思つておりますので……。まして、今回のようなお話は世間によくあることです。からどうしようもなく、心がくじけてしまひまして……。一緒に下向いたしましょう。齢を取つてものの心も少しは弁えている私でさえ将来のことまでは考えることができず、この頃の中納言殿のあ

りさまをまつたくすばらしいと拝見していただけますので、まして姫君の若い心には、ひたすら中納言殿になびきなさつて、心惹かれていろいろにお見えなので、もしありのままに申し上げたら連れて行き難いのではないでしょうか。ただ、よく油断させておいて、私が筑紫へ下向する時に誘つてみましょう」と言う。「それにまさる手立てはありません。それでは、大弐にそのことを知らせましょう」などと言つて、隣の主人は帰つた。

〔34〕叔母、心中で女君と中納言の關係を否定

心の中にも、「みるめにあかぬ御さま・かたちのめでたきにまよひて、『よきさいはひもいできしかな』と思ひしかど、行末たのもしき御もてなしあらんともおもはず。まづは、かくほどふるまでとにもわたし給はず、おはしますとて、ぬす人などいふひたぶるものゝしのびありくらむやうに、よなか・あかつきならで見え給ふ事もなきをあやしう思ひ給ひしは、さは、大弐の給へるやうに、秋風たゞばかれ給はんとにや。又さらで、おとゞへわたり給ふにしては、はらから物し給はんもまたいかにや。さばかりめでたく、あなたかなたにもてかしづかれ給はんにももうとにてだにおはせで、なまぐのこのかみにて、かげめに成て、いづかたさまにもめざましきものにおとしめられて、かくあぢなきすまるにておはせんは、むねいたきことのかぎり成べし。とてもかくてもこの君にかゝづらはんは、いと有まじき事」と思ひなりぬ。

〔通釈〕

叔母は心中でも、「見ていても飽きない中納言殿のご容貌やお姿がすばらしいのに心が迷つて、姫君によき幸いが出て来たものだと思つたけれども、これから将来、頼もしいご待遇があるとも思われないわ。だつて、まず第一には、こんなに時がたつまで、お邸に引き取りもなさらず、ここにいらつしやる時にも、まるで盗人などという無法者が忍び歩きでもするように、夜中・暁でなくてはお見えになることもないのを不審に思つていたのは、さては、大弐がおつしやつたように、秋風が立つたら草木が枯れるように、飽きが来たら離れておしまいになるうということだろうか。また、そうならなくて、姫君が中納言殿のお邸にお移りになるにしても、そこにはご姉妹(右大臣の中の君がいらつしやる)というのもまたどうだろうか。あれほどすばらしく、あちらでもこちらでも大事にされていらつしやるだろうに、こちらの姫君は、妹でさえいらつしやらす、なまじいの年上でありながら陰女になつて、どちらからも目障りな者と貶められて、結局今と同じような情けない住まいにいらつしやることになるのは、胸の痛むことの最たるものだろう。とにもかくにも、この君(中納言)にかかすらわるのは、決してあつてはならないことだわ」と思うようになった。

〔35〕叔母、女君に筑紫下向の決心を告げる

『よし、なにごとくもさきの世の御ちぎり』とて、すくせのまゝ

に見はなち聞えてくだらむ事、はた、さらぬわかれのみちならでは一日も有べきことかは」と思ひつゞけて、こなたにきて見給へば、らうたくをかしげなる御様も、みんぶのたゆうなどいふらむ人に見すべくもあらず。「心にまかせぬよの中とは昔よりいひおき侍れど、身にあてゝは此頃こそ思ひしられぬれ。『つくしへ行人のいざなふべきとせちにいふなれば、思ひたちね』といづみどのゝ北のかた聞え給ふ。なき人のためうしろめたく、さりとしてわかきにもあらず。とのゝ御心のあはれにたのもしうおはすを見奉れば、かくてみおき奉るも心もなきすぢはことにはべらねど、こゝらの年月かたときも外々にならはざりしに、わかれ奉らむ悲しさは、是ぞえたふまじき心ちのし侍れば、思ひたえむことは有まじく、かへすゞきこえしかど、いづみどのさへいまして、『このこときゝいれずは、命をうしなふか、さらでは、みやこのうちにも有がたし』とせちにせめのためはすれば、えいなびはてゝなむ、まからむにさだめぬ。『きみをももろともにいざなひ奉らむ』と聞えやり侍れば、『さやうにうつくしく、あはれとおぼす人のおはすらん人を、いかでにしの国のはてへゐて奉らむ。もとよりおのが身にひきそへ奉る御身なりとも、かゝる御さいはひをこそねがふ事にはあらめ。それなむあやにくに、かけても有まじき事』といふなれば、いづかたにつけてもわかれ奉らむこそ悲しうくるしけれ」とて、打ひそみ給ふ。

〔通釈〕

『ままよ、なにことも前世からの約束事だ』と思つて、宿世の

ままに姫君を見放し申し上げて筑紫に下つて行くこともまた、死別という避けられない別れの道でなくては、一日も離れることはできそうにない」と思い続けて、こちらに来て女君の姿をご覧になると、その可憐で美しいご様子も、民部の大輔などというような人にとつて見せるような方ではない。「思い通りにならない世の中だとは昔から言つて置いたことですが、身につまされてはこの頃思い知らされました。『筑紫へ行く人があなたを誘いたいと熱心に言うそうなので、決心しなさい』と和泉殿の北の方（隣家の女主人）が申されます。亡き夫のために気が引けますが、さりとして私はもう若くもありません。（再婚できるのは今しかないと思うのです。）中納言殿の御心が立派で頼もしくいらつしやるのを拝見していますから、あなたをこのままここに残しておきますのも気がかりな点は特にありませんけれども、長い年月片時も離れ離れになることはなかつたのに、お別れる悲しさは、これこそとても耐えられないような気持ちになりますので、筑紫下向を思い立つことはできそうになく、返す返すお断りを申したのですが、和泉殿までがいらして、『あなたがこのことを聞き入れないならば、私は命を失うか、そうでなければ都の中にいられないのだよ』と強く責めるようにおつしやるので、お断りしきれないで、下向することに決めました。『姫君と一緒に誘いしたいのです』と言つてやりましたところ、『そのように美しく、愛しくお思いになる人がいらつしやる方を、どうして西の国の果てへお連れしましょう。もともと自分の身に引き添え申している方で

あつても、こんな御幸運を願うことではありましよう。そういうこととは無理で、決してあり得ないことです』と言うそうなので、どちらにしてもお別れ申しあげることが、悲しく苦しいのです』と言って、顔をしかめて泣き顔になられる。

* 「若いぬればさらぬ別もありといへばいよいよ見まくほしき君かな」(古今集・巻第十七・雑上・九〇〇・業平朝臣のはのみこ)、「世中にさらぬ別もなくもがな千世もとなげく人のこのため」(同・九〇一・なりひらの朝臣)による表現。

〔36〕乱れる女君の心中。大式、叔母のもとに通いはじめる

きゝ給ふ心ちは今すこしみだれまさりて、「いかにせまし。あはれなる事に人もいひしらせ、みづからの心にも、月日にそへて心ふかくちぎりのたまはすれば、かはり給ふべき様にも見奉らねど、いさまた、われだにしらぬこゝろのはては、まして行末うちとくべくもあらず。かれはて給はむあさぢがはらをも、この人にもてかくされてこそ、露のよすがもあらめ。たゞ一方にしたひ聞えてまし」とおもふに、またさすがる事おほく思ひつゞけられて、いみじうかなしければ、物もいはずなきたまふ。

大式は、やがて其ほどにかよひそめてけり。「ふるめかしき身のいまさらかゝるありきのうしろでもをこなるべければ、六でうなるおのが家にわたさむ」ときこゆ。

〔通釈〕

叔母の言葉をお聞きになる女君のお心は、叔母よりもう少し乱れまさつて、「どうしようかしら。心からの愛情をあの方(中納言)も私に言い知らせてくださるし、私自身の心にも、あの方が月日がたつにつれて深く約束の言葉をおっしゃつてくださるから、心変わりなさるようにはお見えでないけれども、さあまた、自分自身でさえわからない心の果ては、ましてや将来打ち解けてくださるはずもない。あの方が離れて行つてしまつて、枯れ果てた浅茅が原のようになった私の身の上も、この人(叔母)に隠してもらつてこそ、露のようなはかない身を寄せるよすがもあるというもの。ただ一筋に叔母君に付いていこうかしら」と思うのだが、一方でまた中納言を慕う別の気持ちもあつてさまざま思い続けられて、ひどく悲しいので、女君はものも言わずにお泣きになる。

大式は、そのままその頃に叔母のもとに通い始めた。そして、「年老いた身で今さらこんな出歩きの後ろ姿を見られるのもおこがましいので、六条にある私の家に移しましょう」と申し上げる。

(以下、続稿)

〔付記〕底本として御所蔵本の使用をご許可下さった原豊二氏に、記して御礼申し上げます。